

人権文化の花を咲かせよう特別編

戦後70周年特集2 鳥羽に残る戦争の傷跡

市民課人権・生活係 ☎ 1126

戦後70周年を迎え、8月には日本各地で太平洋戦争戦没者追悼式が行われ、戦争を体験されたかたがたの話をメディアを通して見聞きされていることと思います。

広報とば8月1日号では、安楽島町の寺田文吉さんの戦地での戦争体験を掲載しましたが、戦争は戦地だけではなく、鳥羽市内にも多くの傷跡を残しています。

今回は、人権文化の花を咲かせよう特別編として、市内の戦時中の様子や施設を紹介します。

三重県に配備された 第4特攻戦隊

みなさんは、鳥羽市に日本海軍の司令部があったことをご存知でしょうか。1945年3月、戦況が悪化し本土決戦を考えた日本海軍は、船や特殊潜航艇を使った特攻部隊を全国に配備し、上陸してくるアメリカ軍に打撃を与えようとしました。これが特攻戦

隊（楠部隊）です。

全国各地9か所に作られ、三重県に配備された第4特攻戦隊は、御前崎（静岡県）から伊勢湾・紀伊半島南岸までを担当し、司令部は鳥羽の旅館「対神館」（現在の戸田屋別館周辺）におかれました。鳥羽を中心に伊勢湾口などに配備された第13突撃隊、船舶の護衛と救助を行う部隊として鳥羽に配備された伊勢防備隊、志摩地方に配備された第19突撃隊で編成されていました。

特攻艇「震洋」

第13突撃隊は、司令部を日和山にある御木本幸吉邸におき、答志島に3か所（島ヶ崎、大崎、和具）、安楽島町加布良古に特攻艇の基地がありました。実際に特攻艇「震洋」が配備されたのは加布良古基地のみでした。

（特攻艇「震洋」とは、水上特攻艇で、船体はベニヤ製のモーターボートです。船体の先に250kgの爆弾を装着し

敵の上陸艇などに体当たりし、敵もろとも爆死する特攻艇。幸い、アメリカ軍は伊勢湾から上陸しなかったため、出撃することはありませんでした）

相島での悲劇

伊勢防備隊は、1943年に御木本幸吉が観光地として整備を進めていた相島（現在のミキモト真珠島）を収用し本部としていました。現在の市民文化会館付近に兵器庫用の地下壕を、賀多神社付近に弾庫用の地下壕を作ったほか、市街地にいくつもの防空壕を掘ったことが当時の資料から分かっています。また鳥羽商船高専付近には、松根油製造用の地下壕や主計科倉庫、病室なども作られました。



（写真）鳥羽中央公園にある伊勢防備隊の供養塔。1986年に建立。今も供養塔は、手入れされ花が手向けられています

相島は1945年7月24日・25日・28日にアメリカ軍艦上機の攻撃を受け、第4特攻戦隊の旗艦である第4号海防艦が撃沈されました。この3日間の攻撃による戦死者は、この艦だけで29人を数えます。

市内の軍事施設

相差町には、陸軍の施設として第443連隊、第3大隊の本部があったという証言があり、3か所の軍事施設（江原、魚見岡、見崎）が置かれていました。また、答志島（築上岬機銃砲台、岡取山陣地ほか）、神島（神島特設見張所、井戸ノ上陣地ほか）には砲台や陣地が数多く確認されています。

陸軍伊良湖試験場より発射された砲弾の着弾を観測するために設けられた施設として、神島、菅島、石鏡の3か所に監視の哨が設けられ、神島監視の哨は、三島由紀夫の小説「潮騒」が映画化され、ロケ地のひとつとなり著名な場所となりました。

このように、市内各地には紹介しきれないほどの軍事施設や防空壕などがたくさんありましたが、戦後70年が過ぎ、現在では、資料でしか知ることができなくなってきました。日本で唯一地上戦が行われ

た沖縄や、長崎・広島の子爆弾の犠牲となられたかたなどの高齢化が進み、戦争の悲慘さ、むなしさ、憤りなど後世に伝えるかたが、年々少なくなっています。

先人から次世代へ

悲慘な戦争を体験されたかたがたの「子どもや孫を戦地に送ってはいけない」といった思いや願い、「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」という日本国憲法の不戦の誓いにより、日本は戦後70年、武力行使や戦闘行為を一切行っていないません。

これからも先人の言葉に耳を傾け続け、不戦の誓いを新たに、この先も戦争や紛争のない平和な国となるよう、次の世代へつないでいく責任があります。

（参考文献「三重県の戦争遺跡より」）

人権コラム「人権文化の花を咲かせよう」では、人権は身近にあるものとし、社会情勢や時事問題を取り上げていきます。